

## セリーヌのフラマリオン受容

木下, 樹親  
九州大学大学院人文科学研究院 専門研究員

<https://doi.org/10.15017/16859>

---

出版情報 : Stella. 28, pp.137-151, 2009-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :



# セリーヌのフラマリオン受容

木 下 樹 親

## 1. セリーヌと同時代フランスの新聞・雑誌

セリーヌの周囲にはしばしば同時代フランスの新聞・雑誌があった。1945年  
末から1年余、デンマークで獄中の身となり、釈放後はさらに4年間、同国に  
留まることを余儀なくされたとき、母国の政治情勢と自身の引き渡し要求にか  
んする情報収集や母国語への飢えを満たす目的で、『フィガロ』『レットル・フラン  
ンセーズ』『ヌーヴェル・リテレル』などの新聞を送ってもらっていたのは周  
知の事実である<sup>1)</sup>。あるいは時代を遡ると、セリーヌが実際に関わった雑誌が存  
在する。17年6月から19年1月まで刊行された発明家向け情報誌『ユーレカ』  
がそれだ。17年から翌年にかけての短期間ではあったが、ルイ・デトゥーシュ  
青年は編集部で校正や使い走りといった雑用を担っていたのである<sup>2)</sup>。この些  
か胡散臭い小雑誌と、一時期、編集次長を務めていた通俗科学普及者アンリ・  
ド・グラフィニーことラウル・マルキが、セリーヌの第2長編小説『なしく  
ずしの死』に登場する『ジェニトロン』誌と出版主クルシアル・デ・ペレール  
のモデルになったことは言うまでもあるまい。熱気球のデモンストレーション  
飛行、永久運動装置や釣鐘型潜水器のコンクール、地電流放射農業——同小説  
の後半でクルシアルが実施したこれらの事業の描写には、作家が『ユーレカ』  
誌のメッセンジャー・ボーイであった頃に見聞した知識が少なからず寄与して  
いると思われる。同誌は若き日のセリーヌの「並外れた想像力を溶かし育むた  
めの驚くべき坩堝だった」のである<sup>3)</sup>。

ところで、『ユーレカ』誌の出資者兼編集長はラ・シレーヌ出版の経営者ポー  
ル・ラフィットであった<sup>4)</sup>。彼は戦時産業に手を染めつつも戦争の早い終結を  
願い、それに益する発明の情報交換の場として同誌を創刊したのであるが、彼  
が手がけた出版物のなかで最もよく知られ、はるかに長命だったのが『ジュ・  
セ・トゥ』誌（1905年2月創刊、39年8月終刊）である<sup>5)</sup>。読者の知識欲を満

たそうという気概を誌名に掲げ、副題「図解世界百科」に違わず多くの写真と挿絵を含むこの総合月刊誌には、フランス内外の政治経済情勢からモードにいたる広範な時事的記事や、モーリス・ルブランのリュパン・シリーズをはじめとする読み物が掲載されていた。同誌を吸収することになる、傾向を同じくする月刊誌『レクチュール・プール・トゥス』とともに、20世紀前半、大いに読まれた大衆誌である。実はセリーヌは両誌に目を通しており、たとえば『またの日の夢物語』の先駆稿のひとつには次のような一節がある――

僕らは2人で協力してるんだ、まあある意味ね……奴〔マイクロネジム〕が僕にいろいろな面白い写真とか、奇天烈抜粋とかを見つけてくれる、『レクチュール・プール・トゥス』『ジュ・セ・トゥ』『シャリヴァリ』『パン！パン！』『スーリール』をみんなもってるから……奴が見つけてくれるものは見る価値がある、あの白眉、傑作は〔…〕<sup>6)</sup>

これは、セリーヌが44年にフランスを離れる直前まで住んでいたモンマルトルでのエピソードにもとづく記述である。彼の読書は単なる娯楽に留まるものでなく、自作に活かせるような素材や発想のヒントを探すという目的も兼ねていた。じじつ、反ユダヤ主義パンフレ『皆殺しのための戯言』と『死体の学校』の再刊（それぞれ43年、42年）に新たに挿入された写真は『ジュ・セ・トゥ』誌や『レクチュール・プール・トゥス』誌などを出典としている<sup>7)</sup>。

とりわけ『ジュ・セ・トゥ』誌には彼が参考にしたと思われる科学・医学関連の記事や戯曲がいくつか掲載されていて大変興味深いのだが、ここではあるひとりの人物による記事に着目し、その著作も援用しつつ、セリーヌ作品との関連を考察してみたい。その人物とはカミーユ・フラマリオンである。

## 2. フラマリオンの略歴、主要著作、基本思想<sup>8)</sup>

カミーユ・フラマリオンこと、ニコラ・カミーユ・フラマリオンは1842年2月26日、フランス北東部モンティニー・ル・ロワに生まれた<sup>9)</sup>。初等教育を終えたのち、56年秋から、短期間ながら彫金・彫刻師のもとで見習いをする傍ら、夜に独学で、やがて理工科学協会が行っていた無料の講義で勉学に励む。58年、パリ天文台に勤務するが、天体観測でなく机上での理論計算に忙殺され、上司と反りが合わず。61年、心霊研究家アラン・カルデック主宰のパリ心霊学会に参加し霊媒を務める（のちに決別）。62年、処女作『生物が住む世界の多様性』

によって科学・天文学啓蒙家の道を歩みだす。68年から気象観測のため、熱気球飛行を敢行。79年、代表作『大衆天文学』を出版。分かりやすい語り口が人気を博し、ベストセラーとなる。81年、レジオン・ドヌール勲章騎士章を授与される。82年、学術雑誌『天文学』を創刊。83年、パリ郊外ジュヴィジエール天文台を建設。87年、フランス天文学協会を設立。97年、あるイタリア人霊媒の交霊実験に参加し、以降、同霊媒と実験を重ねる。99年から心靈現象にかんする調査を実施し、彼のもとに寄せられる体験談の分類・考察に没頭する。天文学の発展・普及へのさらなる貢献が認められ、1922年、レジオン・ドヌール3等勲章に昇進。25年6月3日、死去。翌年、24年に発見された小惑星がフラマリオンと命名される。なお、弟エルネスト（1846-1936）はフランスの大手出版社のひとつフラマリオン書店の創始者で、兄の著作を多く出版することになる。

フラマリオンは科学・天文学啓蒙家、SF作家、心靈科学研究家という3つの顔をもっている。上記以外の主要著作は次のとおり——

- 天文学 『空想世界と現実世界』(1864), 『天文学研究読本』(全9巻, 1867-80), 『火星』(1892), 『月あかり』(1894)
- SF 『無限の物語』(1872), 『ルーメン』(1887), 『星をちりばめた夢』(1888)\*, 『ウラニア』(1889), 『世界の終わり』(1894)\*, 『ステラ』(1897)
- 心靈科学 『未知なるものと心靈の問題』(1900)\*, 『未知なる自然の力』(1907), 『死とその神秘』(3部作, 1920-22)\*, 『取り憑かれた家』(1923)
- その他 『クラカトアの噴火と地震』(科学エッセイ, 1890), 『ある天文学者の伝記的・哲学的回想録』(自伝, 1911)<sup>10)</sup>

フラマリオンの思想の中軸を成すものが、科学への絶対的信頼であったことは言を俟たない。その特徴は、天文学的知見によるキリスト教との決別と、「相対主義による実証主義の拡大」<sup>11)</sup>の2点に要約される。まず前者について——。家庭が敬虔なカトリックであったことにくわえ、親元を離れて神学校で教育を受けざるを得なかったため、少年期のフラマリオンはキリスト教的世界観に浸っていたと言ってよい。しかしながら、天文学は地球と人間中心の天動説の虚偽を暴き立てたのである。次第に天文学研究にのめり込んでいくフラマリオンが科学の進歩を阻みかねないまでに狭隘なキリスト教の価値観と袂を分かつのは時間の問題であった——「18歳で、私はイエスの神性、秘蹟、カトリック教会の教理全体を構成しているものを信じることをやめたのだ」<sup>12)</sup>。先述したカ

ルデックとの不和の原因もこの点に他ならない。次に後者「相対主義による実証主義の拡大」について——。産業革命がすでに加速度的に進展していた19世紀後半、最も重視された思想のひとつがオーギュスト・コントの実証主義であった。だが、フラマリオンはその前提たる物質主義および人間の知覚への信頼性を脆弱であると批判し、科学のさらなる進歩の可能性を謳った——「我々は絶対なるものを何も知らぬ。我々の判断はすべて〈相対的〉で、それゆえ不完全で未完成」なのであり、「昨日の未知なるものは明日の真実である」<sup>13)</sup>。この積極的な相対主義は、科学での理解を超越した心霊現象こそ科学的に実証・解明されるべきだというフラマリオンの理念を正当化するものでもあったと考えられる。

フラマリオンは膨大な著作を残したにもかかわらず、現在ではほとんど忘れ去られている。フランスでは『死とその神秘』(圧縮版2分冊)と『取り憑かれた家』のみがポッシュ版で刊行されただけで、新本で読める著作は皆無である。一方、英語圏では、『ルーメン』や『世界の終わり』の翻訳が出版され、H・G・ウェルズからJ・G・バラードに至る終末の世界を題材としたSF作家の先駆者のひとりとして再評価されているが、あくまで一部での評価にとどまっている感は否めない。肝心の天文学については、愛好家人口の裾野を広げた功績は認められるとしても、20世紀半ば以降における理論の精緻化と飛躍的な諸発見を考慮すると、フラマリオンの学術上の貢献は相対的に低いと言わざるをえない。なによりも、在野の研究者であったことにくわえ、心霊科学に傾倒してしまったこと、この2点ゆえに、彼の言説は眉唾ものと見做されるきらいがあったのである<sup>14)</sup>。

### 3. 『ジュ・セ・トゥ』誌におけるフラマリオン

『ジュ・セ・トゥ』誌に掲載されたフラマリオン名義の記事はけっして多くなく、現在までのところ確認できたものは次の9本のみである——

- ① 「世界の終わり」(第1号, 1905年2月15日, 53-62頁)
- ② 「空の旅」(第30号, 7年7月15日, 741-747頁)
- ③ 「我々が翼をもつとき」(第32号, 7年9月15日, 147-156頁)
- ④ 「世界, 無限の塵」(第42号, 8年7月15日, 741-750頁)
- ⑤ 「自然の怒り」(第49号, 9年2月15日, 131-138頁)

- ⑥「科学は地球を穿たんとす」(第54号, 9年7月15日, 733-741頁)
- ⑦「6千万キロメートルの深淵」(第57号, 9年10月15日, 355-363頁)
- ⑧「忍び寄る災禍」(第62号, 10年3月15日, 172-182頁)
- ⑨「空の火災」(第63号, 10年4月15日, 309-316頁)<sup>15)</sup>

大別すると、天文学関連の記事(①, ②, ④, ⑦, ⑨)と、地球上での科学的現象を扱った記事(他の4本)に分類できる。一般大衆を読者層とする雑誌の記事であるため、いずれも平易な文章で構成されており、フラマリオンの科学啓蒙家たる側面がよく窺える。これらを通読すると、次の3点に気づかされる。まず、抒情性や文学的比喩を、ときにはブラックユーモアをも交えた文章が散見すること。次に、天文学的終末論が提示されていること。そして平和主義である。実はこの3つの特徴こそ、フラマリオンとセリーヌの接点と考えられるのだ。

まず特徴1の例として、月にかんする基本的な知識を紹介した記事②の冒頭を見てみよう――

夜のしじまに、せわしない世間、それは騒々しいまでの手管を尽くして大半の人々の生活を苦しめているのだが、その喧騒から遠く離れ、限りなく広がる海の鏡の上で月の青白き面おもてが平和裡に君臨するとき、私たちはこの世に存する最も崇高な光景のひとつを見つめている、すなわち果てしない大洋を、果てしない天空を。[②-741]

これは月に思いを馳せる文章のステレオタイプで、特に着目すべき点を含むわけではない。だがここに見られる抒情性は、文学作品を渉猟して詩的想像力の展開を研究した科学哲学者ガストン・バシュラールを想起させるし、なによりもフラマリオンのロマン主義的嗜好を如実に示している。それは、この直前のエピグラフにユゴーの詩「月光」の一節、「月は煌めき波上で眠りし」が置かれていることから明白である<sup>16)</sup>。もちろん雑誌の性格上、読者に好奇心を抱かせるため、明瞭なイメージの喚起に腐心した結果でもあろう。実際フラマリオンは、考察対象を太陽系の惑星に敷衍した続編記事④と⑦において、火星に生命体が存在する可能性を示唆し、そこの詩人たちが地球の美を賞賛しているかもしれぬという夢想到に戯れている [cf. ④-744, ⑦-360]。あるいは、環をもつ土星を「夢幻的スペクタクル」[④-745]と形容したり、地震に伴う津波を「海は口を開けた怪物のように見えた」[⑤-132]と表現したりと、この科学啓蒙家

は多様なレトリックを駆使するのである。

こうした比喩がブラックユーモアに彩られた例として、創刊号の「科学と自然」欄を飾った記事①を取り上げたい。これは、地球が滅亡するとしたら、いかなる原因が考えられるかを解説したエッセイである。このなかでフラマリオンは、天体の誕生から滅亡に至る過程を人間の一生に喩えている――

生まれたばかりで目の前に長い寿命が開かれた子供は、複数階から成り、各窓に優れた射撃手が構えている家々が立ち並ぶ巨大な通りを辿らねばならない人物に比較されよう。この人物にとっては、その通りを踏破し、ほとんど至近距離から浴びせられる銃撃を避けることが肝要なのだ。[①-56]

「銃撃」はさらに疾病・事故・戦争・犯罪に換言されているが、地球にとっては異常気象や天変地異の謂である。「銃撃」をかいくぐり、通りの終わりに無事に到達して天寿を全うするか、それとも途中で弾丸を浴びて斃れるか。フラマリオンはこう問いかける。しかも、天体も人間も根本的に「死刑囚」[①-56]の刻印を受けていると言うのだ。この皮肉な考え方は、「この世の真実は死だ」と記したセリーヌの想像力に酷似している<sup>17)</sup>。また彗星の接近や衝突で大気の組成が変容した結果起こりうる〈死の舞踏〉的事態の描写においては<sup>18)</sup>、「錯乱」や「途方もないサラバンド」[①-59]といった、ほとんどセリーヌ的な語彙が確認できる。フラマリオンの文章には、セリーヌの言語表現上のルーツを見いだせるのではあるまいか。

〈世界の終わり〉――記事①の題名に選んだだけでなく、同名の小説を上梓したほど、フラマリオンの脳裏に焼きついていたテーマである。しかし彼が言う終わりとは、ひとつの線上で始まりの対極に位置づけられるようなものではない。ここから特徴2の天文学的終末論が導出される。フラマリオンは「人間の出来事は永遠の〈歴史〉の時計上では数秒のごとく過ぎる」[⑨-316]と述べている。たしかに宇宙の悠久の時間においては、人間の一生のみならず、天体の一生も瑣末事であろう。そしてある生が死を迎えても、それは絶対的な終わりではなく、新たな生の始まりとなる――

宇宙の未来とは、宇宙の過去である。終わりも始まりもありえない。

自然は復活への汲み尽くせぬ力を永久に蓄えている。すべては変わり、すべては変容するが、いかなるものも破壊はされぬ。中心恒星も宇宙もその灰から再生する。生

は永遠なのである。[①-62]<sup>19)</sup>

フラマリオンは、絶えざる再生と復活によって、終わりと始まりがなしくずしにされたメビウスの帯のような時空を想定することで、世界が滅亡するとしても、それを感情的あるいは悲劇的に捉えるのでなく、宇宙の摂理における必然と見なすのである。天文学的知識と哲学的想像力の邂逅による終わりなき終末論——これは『なしくずしの死』でクルシアルが垣間見せた時間論に影響を及ぼしていると思われる<sup>20)</sup>。そもそも、この登場人物のモデルとなったラウル・マルキがアンリ・ド・グラフィニーの筆名で著した啓蒙的読み物には、フラマリオンをモデルとした人物が姿を見させている<sup>21)</sup>。マルキら、20世紀初頭のフランスで科学の普及に尽力した小知識人たちにとって、フラマリオンがきわめて重要な存在であったことは間違いないし、セリーヌもその事実を踏まえたとうえで小説の人物設定をおこなったことは否定できまい。これについては次章で再び取り上げる。

最後に特徴3の平和主義についてだが、フラマリオンは科学が進歩を遂げるたびに軍事に供される運命にあることを認識していた——「地球の人類はかなり野蛮な動物種であり、[...] それゆえ飛行船の第一の用途は国際間の殺戮術に充てられるであろう」[③-150]。「国際間」とは対ドイツの意味である。引用文冒頭の自虐的な皮肉には、彼が好んだ気球の発展形である乗り物が戦争兵器と化すことへの苦々しい思いが前提されていると言えよう。そこで、彼は軍隊の平和的利用を提言する——

そしておそらく、いつの日か戦争に充てられる予算の使用目的が部分的に形を変えるならば、私たちは次のように問うであろう。この種の異なる実践は、大砲・銃・砲弾・弾丸・魚雷艇・他の破壊兵器の実践と同じくらい有益ではないのか。そして、結局、人民間の戦争は最終的に消滅されうると決定を下すことが好ましいのではないか。地熱井戸によって明らかにされる科学上の発見と鉱物資源がいかなるものであれ、この結果こそ最重要かつ最良なのではあるまいか。

これはもちろん夢である。[⑥-740]

「異なる実践」とは、地球の深部を調査するための掘削作業を兵士に担わせるというものだ。フラマリオンは軍隊の高い労働力を学術目的で有効に活用すべきだと主張したのである。しかしながら、引用文前段の条件法による婉曲表現の

列挙と、実現不可能性そのものを表す後段の一文を見れば、彼の平和主義が儚い夢にすぎなかったことが分かる。この記事から30年後、セリーヌは第2パンフレ『死体の学校』のなかで、ナチスドイツとの同盟締結による戦争回避を力説した。だが、狂乱的な反ユダヤ主義言辞にまみれたこの書に十分な説得力はなかったし、そもそも著者は新たな殺戮戦を目前に控えた時代に対し絶望を抱いていた。フラマリオンとセリーヌの平和主義に直接の関係があるわけではないが、両者とも改善されえぬ状況への諦念に包まれたものであったことは確かである<sup>22)</sup>。

#### 4. セリーヌのフラマリオン受容

セリーヌは独学者フラマリオンに敬意を払っていた<sup>23)</sup>。彼の憧憬の念は作家として名を成した後も変わらなかったように思われる——「私は〈大学者〉には夢中になるのです。心はフラマリオンの下っ端、ラスパイユに準じ、しくじったル・ボン博士というわけです！」<sup>24)</sup>。問題は、セリーヌがフラマリオンのどの著作をいつ読んでいたのかという点である。しかし、それを明記した資料がまったく確認されていないため、現時点では実証的な結論を述べることはできない。しかしながら、少なくとも『ジュ・セ・トゥ』誌の記事にかんしては、まず次の2つの仮説が立てられるであろう。第一、ルイ・デトゥーシュ少年はリアルタイム（1905-10年）でフラマリオンの記事に目を通していた。第二、1940年代前半、セリーヌはパンフレの再版に挿入する写真を選ぶさい、記事を（改めて）閲覧した。ともに可能性はなくはないが、第一の場合、セリーヌは十代前半と若いため、フラマリオンの存在や思想を意識できていたかどうか疑問が残る。さらに第二の場合ともども、記事を閲覧したとしても、それに関連する言及が見られないため、影響の有無を判断できない<sup>25)</sup>。したがってここでは、もうひとつの仮説を検討してみたい。すなわち第三、セリーヌは『ユーレカ』誌勤務時（23歳）にフラマリオンを知り、もしくは意識し、『ジュ・セ・トゥ』誌の記事をはじめとする彼の著作に接するようになった、というものである。

冒頭で述べたとおり、『ユーレカ』誌の出資者兼編集長は『ジュ・セ・トゥ』誌の出版主でもあったため、前者の編集部で働くことになった若きセリーヌには後者を目にする機会があったはずだ。彼にとって、それは少年期に読んだ懐かしい雑誌であったかもしれないし、このとき初めて手にした雑誌であったかも

しれない。いずれにせよ、セリーヌが『ユーレカ』誌のメッセンジャー・ボーイであったときに、『ジュ・セ・トゥ』誌の当時の刊行分はもとより、フラマリオンの記事を掲載したバックナンバーにも目を通した可能性はかなり高い。なぜならば、この発明家向け雑誌の編集部はフラマリオンと密接な関係にあったと思われるからである。これについては、小説『なしくずしの死』の描写をもとに考察しなければならない。次の文章を見てみよう――

僕たちはクルシアルのところであの大フラマリオンの影響下で働いていた、彼の献辞入りの写真がショーウインドーの真ん中に掲げてあって、ああだのこうだの、ちょっとでも意見が分かれたときには、まるで神様みたいに彼にお伺いを立てるのだった！彼こそ最後の頼みの綱であり、神意であり、一切だった。<sup>26)</sup>

これは、主人公フェルディナンがクルシアルに雇われて間もない頃にジェニトロン社の様子を説明するくだりのひとつである。ここで「お伺いを立てる」対象がフラマリオン本人なのか、その著作なのか、明言されていないが、自伝的色彩の強い小説であるだけに、セリーヌが勤務していた頃の『ユーレカ』誌編集部の雰囲気を反映している可能性は否定できまい。そうだとすれば、『ジュ・セ・トゥ』誌のみならず、フラマリオンの諸著作が編集部に資料として配架されていたと考えるのは自然なことであろう。科学と天文学の普及に尽力したこの先達は、民間の発明家を鼓舞する小雑誌の保証人的な存在でもあったのだ。それほど影響力は絶大で、「フラマリオンが連中〔購読者〕には明らかに人気があり、その分オーギュスト〔・コント〕にはうんざりしてた」[MC, 840]のである。

さらに、『ユーレカ』誌編集部にはセリーヌとフラマリオンの媒介と呼びうる人物がいた。クルシアルのモデル、ラウル・マルキである。当初、クルシアルは多岐に渡る学識を誇り、膨大な数の著作をものした驚異的な科学者として読者に提示される。しかし、競馬と売春宿通いにのめり込んだ山師という実態がやがて明かされ、彼は主人公を引き連れて転落の一途をたどっていく。この設定の負の部分はもちろんセリーヌの創作であるが、マルキはたしかに多くの科学概説書や長編小説などを出版し、また熱気球飛行を幾度も敢行するなど、フラマリオンの後継者の側面を備えた人物であった。それゆえ斯界に名を馳せていたのは間違いなく、フラマリオンとも交流があったはずである。じじつ、

アンリ・ド・グラフィニー名義の著作『素晴らしき旅行——地球から星々へ、無限旅行』(1882)と『あるロシア学者の不思議な冒険』(1889)にはフラマリオンの序文が寄せられている<sup>27)</sup>。クルシアルは、役人への不満をフラマリオンに訴えたさい、耐えるよう諭されたことをフェルディナンに披露し、「なにしろ私は彼の弟子だ……それを忘れるわけにはいかなかった」[MC, 871]と締めくくった。こうした出来事が実際にあったかどうかは定かでないが、マルキがこの台詞のようにフラマリオンとの紐帯を強く意識していたであろうことは想像に難くない。以上を勘案すれば、『ユーレカ』誌という環境とマルキとの接触によって、若き日のセリーヌがこの上司自身の師フラマリオンの重要性を認識し、その著作を紐解くようになったと推論できるのである。

ところで、クルシアルの自殺後、失意と消耗を携えてパリに戻ったフェルディナンが、珍しく澄み渡った夜空に広がるたくさんの星座をなんの困難もなく次々と指摘でき、我ながら驚くシーンがある。山師だったとはいえ、若輩者の教育には熱心だった故人への感慨に耽る主人公の姿が印象に残る場面だが、このとき彼の後見人がきわめて対比的に描写されている——

エドワール叔父さんも知ってたんだ、昔は星座を……あるときは、天頂点だってみんな知ってた……三角座から射手座まで、北半球のはほとんどそらで！……〈フラマリオン〉を全部知ってたし、当然〈ペレール〉も！……でもみんな忘れちゃってた……もう一個も覚えてなくて……もう〈天秤座〉さえ見つけられなかった！ [MC, 1095]

この主人公の母方の叔父は、たとえば自動車など、最先端の科学技術による機器を享受していた人物である。つまり、クルシアルらの著作を最も活用した人の典型なのだ。にもかかわらず、フラマリオンの第一の専門分野の知識は彼から雲散霧消している。その伏線は、かつてジェニトロン社が荒らされ、胸像も破壊されたときに張られていた——「首から折られたフラマリオン」[MC, 951]。こうした皮肉な設定の背景には、心霊科学を肯定した天文学者に対するセリーヌの両義的な判断を読み取ることができるのかもしれない。

## 結 語

ラウル・マルキについては、『なしくずしの死』の後半を占める重要人物クルシアルの直接のモデルであるから、セリーヌ研究の文脈においてはすでに資

料がまとめられている<sup>28)</sup>。しかしながらフラマリオンについては、マルキがおこなったような科学啓蒙活動の基盤を築いたにもかかわらず、その業績が十分に考察されたとは言いがたい状況のままである。セリーヌとの関わりにおいても検討の余地はあるように思われる。これについては、本稿での素描的分析をもとに今後もさらに考察を深めていきたい。

## 註

- 1) Voir les lettres de Céline à Lucette Destouches, du 6 février et du 13 août 1946, et celle à Thorvald Mikkelsen, du 25 février 1947, in Louis-Ferdinand CÉLINE, *Lettres de prison à Lucette Destouches et à Maître Mikkelsen 1945-1947*, Paris: Gallimard, 1998, pp. 41, 217 et 359.
- 2) 『ユーレカ』誌とセリーヌとの関係については、次の伝記が詳しい——Frédéric VITOUX, *La Vie de Céline*, Paris: Grasset et Fasquelle, 1988, pp.120-124.
- 3) *Ibid.*, p.122.
- 4) セリーヌは晩年の長編小説『北』のなかで次のように述べている——「ポール・ラフィットのところでは雇われ、配達係や秘書をやった頃、僕は猛烈に走りまわってたもんさ」(Louis-Ferdinand CÉLINE, *Nord*, in *Romans II*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1972, p.519)。ラフィットとラ・シレーヌ出版については、パスカル・フーシェの次の労作が網羅的である——Pascal FOUCHÉ, *La Sirène*, Paris: Bibliothèque de la littérature française contemporaine de l'Université de Paris 7, 1980。
- 5) *Je sais tout*, magazine encyclopédique illustré, Paris: Pierre Laffitte, n° 1 (15 février 1905) - n° 403 (15 août 1939)。このうち、2009年10月現在、創刊号から192号(1921年12月15日号)までの分は、フランス国立図書館のインターネット・サイト Gallica にて公開されている(ただし17年下半期と20年上半期の刊行分は欠落)。
- 6) Louis-Ferdinand CÉLINE, Version B de *Féerie pour une autre fois*, in *Romans IV*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1993, p.774。なお、『レクチュール・プール・トゥス』『ジュ・セ・トゥ』以外の3誌は、挿絵中心の風刺雑誌である。
- 7) Voir Régis TETTAMANZI, «L'Iconographie célinienne des pamphlets», in *Actes du colloque international de Paris 1<sup>er</sup>-5 juillet 1994*, Tusson/Paris: Du Lérot/Société d'études céliniennes, 1996, pp.213-221.
- 8) フラマリオンの伝記的事実については、次の資料を参考にした——Philippe de LA

- COTARDIÈRE et Patrick FUENTES, *Camille Flammarion*, Paris: Flammarion, 1994; Danielle CHAPERON, *Camille Flammarion. Entre astronomie et littérature*, Paris: Imago, 1998; 稲垣直樹『フランス〈心霊科学〉考』, 人文書院, 2007年。
- 9) フラマリオンは回想録の冒頭で、同じ誕生日のエチエンス・モンゴルフィエ、フランソワ・アラゴ、ヴィクトル・ユゴーを挙げ、軽航空機製造・操縦術、天文学、詩が3つのミューズであったと述べ、己の進路を言わば運命論的に示唆している。Voir Camille FLAMMARION, *Mémoires biographiques et philosophiques d'un astronome*, Paris: Flammarion, 1911, p. 7.
- 10) 一覧中アステリスクを付した著作は大正末から昭和初期にかけて邦訳が出版されている。順番に記すと——『星空遍路』, 武者金吉訳, 文明協会, 昭和2年(昭和10年に大勝館から再刊); 『此世は如何にして終るか: 科学小説』, 高瀬毅訳, 改造社, 大正12年; 『未知の世界へ』, 大沼十太郎訳, アルス, 大正13年; 『死とその神秘』, 大沼十太郎訳, アルス, 大正14年。また『ルーメン』については、天文学や飛行機に多大な関心を示した異端のモダニスト作家、稲垣足穂が英訳をとおして、梗概を紹介している。「僕の《ユリウカ》」(1956年), 「宇宙論入門」(1947年), 『稲垣足穂全集』第5巻所収, 筑摩書房, 2001年を参照。
- 11) 稲垣直樹前掲書, 310頁。
- 12) FLAMMARION, *Mémoires biographiques et philosophiques d'un astronome, op. cit.*, pp. 183-184.
- 13) Camille FLAMMARION, *L'Inconnu et les problèmes psychiques*, Paris: Flammarion, 1900, pp. 27 et 17.
- 14) ド・ラ・コタルディエールとフエンテスは、天文学が普及した今日、フラマリオンの名前がますます口にされなくなっていることの原因として、次の4点を挙げている。① 科学の発達に伴うフラマリオンの業績の相対化, ② 人類の幸福に貢献するものという科学信仰の形骸化, ③ フラマリオンの正当な学術的身分の欠如と心霊科学への関与, ④ 彼の弟子たちによる過剰な崇拜。Voir LA COTARDIÈRE et FUENTES, *Camille Flammarion, op. cit.*, pp. 341-342.
- 15) 以下、これらの記事からの引用には、[ ] に通し番号①～⑨と頁数のみを記す。
- 16) これは「月光」(『東方詩集』に収録)の第1行と最終行を成す詩句であるが、正しくは「月は澄み波上で戯れり」である。フラマリオンは記憶に頼って引用したものと思われ、2単語の異同が見られる。
- 17) Louis-Ferdinand CÉLINE, *Voyage au bout de la nuit*, in *Romans I*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1981, p. 200.
- 18) 彗星の尾の部分には有毒ガスが含まれているため、地球への接近による影響で、人類は呼吸困難に陥り、苦悶死するのではないか——1910年春のハレー彗星の接近を前にして、世界中の人々が恐怖に慄いた噂がこれである。フラマリオンら天文学者は杞憂にすぎぬことを訴えたが、記事①のこうした文彩や終末にかんする彼の著作が噂を助長し、またメディアによる扇動も手伝って、人々の不安は増大するいっば

うであった。同年初頭、パリが洪水に見舞われ、甚大な被害を被ったことも（記事⑧はその原因考察と予防への提言である）、社会不安が蔓延する下地を形成していたと言える。なお記事⑧でフラマリオンは、パリの地下を「パリの最奥 (entrailles)」[⑧-180]と表現しているが、この語が、セリーヌが好んでもちいた言葉のひとつであることも指摘しておこう。

- 19) 『世界の終わり』はフラマリオンの天文学的終末論を長々と披瀝している点において小説らしからぬ小説であるが、「そして終わりなき空間は永久に宇宙と星々、魂と中心恒星に満ち、そして永遠は永久に続いた。なぜならば、終わりも始まりもありえないからだ」という文章で締めくくられており、この考え方がすでに確立されていたことが分かる (Camille FLAMMARION, *La Fin du monde*, Paris: Flammarion, 1894, p. 385)。また、この終末論はフラマリオンの心霊科学の結論に直結している——「死とは生の門戸である。肉体は精神の有機的な衣にすぎない。それは移ろい、変わり、崩壊する。だが魂は残るのだ」(Camille FLAMMARION, *La Mort et son mystère, tome III. Après la mort*, Paris: Flammarion, 1922, p. 385)。
- 20) 物語の終盤近くで、地電流放射農業の失敗の兆しが現れだしたとき、クルシアルは主人公を相手に愚痴をこぼすなかで、次のように訴える——「俺にはいっぺんに二つのことはもうできんよ…… […] 生命のことを言ってんじゃない、フェルディナン、〈時間〉のことだよ！……生命ってのは俺たちで、そんなものは無だ…… 〈時間〉だよ！ それがすべてなんだ！……」(Louis-Ferdinand CÉLINE, *Mort à crédit*, in *Romans I, op. cit.*, pp. 1018-1019)。
- 21) Voir LA COTARDIÈRE et FUENTES, *Camille Flammarion, op. cit.*, p. 241.
- 22) フラマリオンは、同時代のひとつの潮流であったエドワール・ドリュモンらの反ユダヤ主義の立場にあったと言われている (voir *ibid.*, p. 246)。また『ジュ・セ・トゥ』誌の記事③では黄禍論に言及している [③-150]。
- 23) ルイ＝アトウ＝シュは小学校卒業後、ドイツとイギリスへの語学留学、彫金工房を含む数軒の商店での見習い奉公、従軍と除隊を経たのち、独学で大学入学資格試験を突破し、レンヌ大学医学部に入学した。なお、セリーヌ研究者イヴ・バジェスはバル・エポック期に高まった〈独学〉の状況を説明するなかで、寄与した雑誌のひとつに『ジュ・セ・トゥ』誌を挙げ、またフラマリオンの天文学マニュアルにも言及している。Voir Yves PAGÈS, *Les Fictions du politique chez L.-F. Céline*, Paris: Éd. du Seuil, 1994, p. 77.
- 24) Lettre à Jean Paulhan, du 2 septembre 1950, in Louis-Ferdinand CÉLINE, *Lettres à La N.R.F., 1931-1961*, Paris: Gallimard, 1991, p. 108.
- 25) 第一の仮説については、フラマリオンの記事が『ジュ・セ・トゥ』誌に掲載された1905～10年は、セリーヌの小学校在籍時期から、独英への語学留学を経て、見習い店員としての勤務の最初期にあたる。この間の事情を勘案すれば、セリーヌがパリ居住時の記事①, ②, ④, ⑤, ⑧, ⑨に目を通していた可能性はありうる。また第二の仮説については、パンフレ再刊に掲載された写真の出典を調べると、『ジュ・

セ・トゥ』誌は1909～11年刊行の第53, 60, 83号から採られていて、フラマリオンの記事の掲載号は含まれていない。しかしながら写真の選定作業は一定の時期のバックナンバーを通覧しながらおこなわれたであろうから、その過程でシリーズが近接時期の該当記事を読んだ可能性は否定しきれない。

- 26) CÉLINE, *Mort à crédit*, in *Romans I, op. cit.*, pp. 837-838. 以下、この作品からの引用は、[ ] に略号 *MC* と頁数のみを記す。
- 27) «Bibliographie des écrits d'Henry de Graffigny», in *L'Année Céline 1993*, Tusson / Paris: Du Lérot / IMEC, 1994, pp. 175-176.
- 28) Voir «Documents. 1. Henry de Graffigny: morceaux choisis et bibliographie», in *L'Année Céline 1993, ibid.*, pp. 149-186.